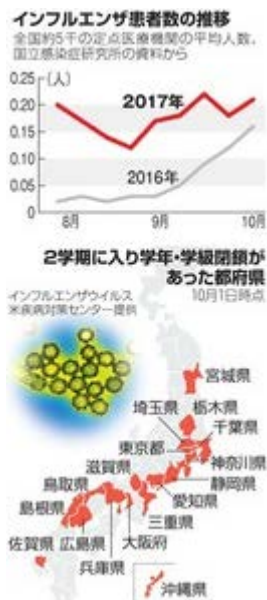


インフル患者増、なぜ今年は早い？ 8月には1歳児死亡

大岩 ゆり、小川 裕介 2017年10月13日07時04分



全国各地で早くもインフルエンザの患者が増えている。9月から学年・学級閉鎖が首都圏などで相次ぎ、すでに17都府県に上る。外国との人の行き来、温暖化などさまざまな要因が考えられるが、専門家は予防策として手洗いやうがい、ふだんの体調管理といった「基本動作」を挙げる。

「流行がわかっていたら、もっと気をつけていた。夏でなければ、こんなことにならなかった」。今年8月、1歳9カ月の長女を亡くした千葉県松戸市の男性（31）はうなだれた。

インフルエンザ患者数の推移



長女が発症したのは8月9日。通っていた保育所で発熱し、昼ごろに妻（28）が迎えに行った。

長女は退園時に「バイバイ」と手を振り、帰りに寄った薬局では大好きな菓子を自分でレジに持って行った。

だが午後2時半ごろ、自宅でけいれんが始まった。1時間ほど続き、救急車で病院に運ばれたが、熱は39・4度に。意識がなくなり、インフルエンザ脳症と診断された。意識障害やけいれんが特徴で、10歳未満を中心に年間100～300人がかかる。

集中治療室で治療が続いた。13日には腕をくすぐると反応して「あー」と声を出した。だが、14日未明ごろ容体が急変。15日午前7時過ぎ、死亡が確認された。

松戸市によると、長女の保育所…

こちらは**有料会員限定記事**です。有料会員になると続きをお読みいただけます。

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.